



## 「水」を考える —日本人にとって「水」とは・・・—

日本植物調節剤研究協会 評議員  
協友アグリ株式会社 取締役専務執行役員 開発部部长  
天野 徹夫

ものの本によると、中国を中心とした東洋圏では、自然に対して「風」「水」「土」の概念があり、その組合せの「風水」「水土」「風土」という言葉で、その地域の地形・土壌・植生などが表現されていました。その中で、日本では「風土」という言葉が、その地域の自然条件等を表す言葉として定着したとのこと。日本には「湯水のごとく」という言葉があるように「水」はどこにも豊富にあり、地域の特徴にならなかったのが「水」以外の「風」と「土」から、「風土」となると推察されています。

我が国は、古来より「水」に恵まれた自然条件にあり、これにより稲も水田での栽培が定着したものと思われま。稲は、水田で栽培することで連作障害から解放され、2,000年以上前から稲作が日本の主作物として食・文化を支えてきました。黄金の稲穂が日本の秋の風景になったのも、きっと日本に水が豊富にあったおかげだと思えます。

水が豊富だった日本ですが、最近ではその事情が変わりつつあります。私が小さいころには、水を食料品のように店から買うとは考えられなかったのですが、今では、日本でも水を買うことが当たり前になっています。更には、ミネラルウォーターは、日本で生産するよりコスト面では輸入の方が安いとか。そうは言っても、今でも日本は水に恵まれた国であり水道の水が安心して飲める国です。世界で、水道の水を飲めるのは、ヨーロッパの諸国、オーストリアやニュージーランドなどごく一部です。世界の多くは、飲料水、工業・農業用水など、水不足が大きな課題です。水の惑星といわれる地球も、水の大部分は海水で、わずかな淡水の多くも南極や北極に氷雪や氷河の形態で存在しているので、人が利用可能な淡水は地球上の水の0.01%に過ぎないからだそうです。

近年、海水を真水化する技術は、日本が得意とする逆浸透膜(RO)などの樹脂膜を使った技術をはじめ、各国で盛んに研究され、その実用化も急速に進んでいます。石油や天然ガスなどの資源が豊富な中東では、それらの資源から得た富で、淡水化の実用化が進んでいます。死海に面したヨルダン

では、1,000リットルの真水を60円で大量生産できるとのこと。生鮮野菜など高価な輸入品だった中東の国々が、広大な砂漠をハウスや農地に変え、あるいは植物工場を建設し、農業大国となる日も近いのかもしれない。

一方、日本では、貴重な水資源の源である森林の保護や管理は立ち遅れています。森は日本の豊かな水資源を支えており、更には牡蠣の養殖などの海の資源も支えています。一時、中国の富裕層による日本の森林買収が、中国は水資源も爆買していると話題になりました。水資源が目的かどうかは定かではありませんが、中国、香港などの富裕層等による、日本の森林買収は今も進んでいます。最も顕著な北海道では、平成29年末時点で森林を所有する外国の法人や個人は159、面積はおよそ2,500haに達し、所有者数、面積ともに5年前の2倍以上に増加しているそうです。

最近、集中豪雨により山が崩れる被害が頻発しています。伐採後の植林放棄や無間伐といった施業放棄地が増加するなど、森林を取り巻く状況は極めて厳しそう。森林の保護管理に私達ができることは多くはありませんが、国産の木材の適正適価での利用など、考える必要がありそうです。

先日、知人が、東京都水道局が主催するバスツアーに参加し金町浄水場(東京都葛飾区)に行った話を聞きました。そこでは、水道水のおいしさのPRがあり、飲んでみてもとてもおいしく感じたとのこと。私も昨年、自宅近くの栗山浄水場(千葉県松戸市)に伺い、水道の浄水技術の優秀さのお話とともに、河川水がきれいになってきているとの話を聞きました。都会の河川の水質は明確に改善方向にあります。これは、工場など産業排水の改善はもとより、家庭レベルでの取り組みの成果でもあるようです。

水稲栽培を支える水資源には、水稲の除草剤にかかわる仕事の私達にとっても、無縁のことではありません。水に感謝するとともに、日本の水資源のこと、真剣に考えてみようと思いました。